

第
I
部

記憶と欲望をないまぜにし

—— T・S・エリオット『荒地』（岩崎宗治訳、岩波文庫）

彼女はドアをじつにゆっくりと閉めた。そして、真夜中に、今、寝入ったばかりの病人をそのまま置いていくかのように、ひっそりと出て行った。私は彼女のゆっくりとした足取りを聞いていたが、足音の消える最後の瞬間にはスリッケースをベッドサイドの足もとに置いていくために戻ってくるのではないかと、半ば怖れるとともに、半ばそれを望む気持ちだった。戻れば、彼女はベッドの端の上に座って、まるで旅からすでに帰ってきたかのように疲れた仕草をするのだ。彼女にとっては今夜になるまで、旅をすることになるとはまったく考えられないことだったから。ドアが閉まると部屋は暗くなってしまったが、廊下から来る一条の光線だけが今は私の明かりとなり、ベッドの足もとまで細い線となって滑り落ちた。しかし、窓辺には暗い濃紺の夜が忍びよっており、開かれたシャッターからは夏を思わせる夜のそよぎが入ってきていた。

また、遠くで、月の光の中を、グアダルキビル川^①の鉛色の谷に沿って、駅に続くマヒナの坂を登ってくる急行列車の汽笛が交差していた。その駅では、彼、ミナヤはイネスがプラットホームのはずれに現れるのではないかと、あえて望む訳ではないが、心なしか待っているのだ。イネスはスリムで独りが好きな性格だが、短いピンクのスカートをはき、髪はポニーテールに束ねている。彼は独りでベンチに座り、タバコを吸いながら、多分、夜の駅の構内の赤い光、線路、駅のはずれに停車中の車両を見ているのだろう。今や、ドアが閉まってから、すべて私の考えで、そうしようと思えば、彼のことを想像することができののだ。それは、つまり、誰のためでもなく、イネスが出ていく前に秘めたやさしさで、整えてくれたシャツに私は顔を沈めることができ、それから、暗闇とシャツの下私の体が温まるのを待つのだ。イネスと彼の二人に何が起こったのか、誰もいないプラットホームで出会い、お互いに気づくまでの歩みの方向づけをすることでさえ、まさに、そのとき、彼らがそこにいること、望んでいること、さらには罪と思うことなどを、作り出して描くかのように私は想像し物語ることができののだ。彼女はドアを閉めたとき、振り返って私を見なかった。なぜなら、そのようなことをしていないと私が禁じていたからだ。私はたった今、彼女の白い繊細な首筋と髪のはえぎわを見ただけだが、廊下の外れの方へ遠ざかるに連れ、弱くなっていく足音を聞いていたが、そこで足音が止まった。たぶん、彼女はスリッパを床の上に置き、今閉めたばかりのドアの方へ戻って来るのだ。そこで、私は彼女がさらに歩を進めるのを怖れ、何とかそれ以上行かないようにと願ったが、すぐにまた再び足音が鳴り響き、すぐに遠く深い足音が階段の方へと移り、彼

女が中庭まで行ったとき、また足を止めたのを知った。そして、彼女は窓辺の方を見上げるのだった。しかし、私は顔を覗かせなかった。そんなことは必要のないことだったから。静けさの中で私は彼女に通りに出て駅まで行くように、ごく小さな声で指示したが、今や、そういった私の意識だけで十分だったのだ。駅では彼は彼女を待ち続けるべきなのかどうかも知らなかった。彼女の足音からして成り行きを推測し、あるいは作り出すなどと書くことは不要な段階になっていた。彼、ミナヤ自身はまだ知らないが、私の推測によると、いつの日か書くという迷いごとに屈するのは避けられないだろうと思う。なぜなら、彼は沈黙していることの価値とか白紙のページを認めないからだ。今、列車を待つ彼の目には人気のない街の通りや煉瓦の壁の向こうに見えるオリブの木陰などが映っているのだろうが、今夜の終わりにマドリッドに着く頃には、マヒナの街からは彼は遠く離れてしまうだろう。しかし、彼の目とそこに映る世界にはイネスと彼が知ることになった家、マリアナの結婚式の肖像写真、ハシント・ソラナが「招待」という簡潔な題の詩を書いていた頃の姿を見つめていた鏡は根強く残るだろう。最初の日には、ミナヤは夜行という最悪の列車から降りたばかりの不機嫌な物思いに沈んだ客人としてその家に現れたが、駅では彼は噴水の反対側から白色の正面、すなわち、石の水盤の縁を水が溢れ出して、上下に流れ、ときにはアカシアの丸い樹冠を越えることもある水の飛沫により半ば隠された高い家をずっと眺めていた。彼はその家を見つめながら彼に合わせる他のいくつかの視線を感じるのだ。そのイメージを膨らませていくと、家が建てられてから過ぎ去ったすべての年月という隔たりが付け加わるのである。そして、今や、それは彼が思い出して

いるものと同じものなのかどうか、あるいは、彼が生まれるずっと以前からその家を眺めたり、住んだりしていたあらゆる人々の記憶の沈殿したものが、目の前に聳え立っているものなのかわからなくなっている。疑う余地のない認識とは記憶喪失である、と彼は考えるかも知れないが、それはまったく鏡だけが持っている天賦のものである。しかし、思い出すことが出来る鏡があるとすれば、その家の正面に備え付けられたものである。そしてそれだけが、不動産の継承とは何かということを認識させてくれる。閉じられたバルコニーの静けさにより隠された寓話だ。それは年月の中に持続するものだ。

角々には夜になると黄色い明かりが点灯されるが、広場を照らし出すほどではない。その明かりは暗闇の中で、小道の入り口を分かれ、漆喰の継ぎはぎや格子の形を明るくするが、教会への入り口を示してくれる。その高い壁の窪みには聖ペテロとおぼしき姿が見えるが、以前、人民の怒りを買ったためか、頭部が切り取られていた。教会は一九三六年以来閉鎖されているが、首のない司祭は切断された手で、今でも祝福を与え、広場にはその名が付けられている。決して開かれることはないが、大きく堂々とした教会であり、ごく稀に車により、振動させられることもある。教会はアカシアの木や垣根より古い。しかし、噴水は教会が建設される前からそこにあつたものだが、ミケランジェロを非常に尊敬していた侯爵が四世紀前にイタリヤから持って来たものである。教会も噴水の散水口も地衣類で薄黒くなっているが、雨が降ると通りに排水をしている。広場から樹木の背後に、ミナヤはたまたまやって来た旅行者のように、その家の建築構造を見、銅製の呼び鈴が働くかどうか疑い、黒ずんだ木を金メッキされた

二つの手で叩くと大きな音がして、クリスタルのドームの内側の中庭に反響した。大理石の敷石ガラスで内張りされた回廊を支える白い柱、歩くとまるで船室にいるような足音が鳴り響く木の床の部屋、あの日六歳のとき、たった一人でこの家に連れて来られて、神秘的な寄木細工の木製の床の上を歩いたが、ついに、想像力を満足させるのに十分な材料に出会い、広いところに踏み込んだという気持ちになった。その午後の早い時間にサンタマリア教会の道につながる広場を歩いているとき、彼の母親は彼の手を握り、少し早く歩かせて、彼を歩道に立ち止まらせた。母親はその家をじっくり見させたいという思いにとらわれていたからだだった。そして、かなり高いドアの陰に何があるのか、最上階のバルコニーと円窓は、夜になると潜水艦の舷窓のように、明かりが灯ることなどを想像させた。そんなとき、ミナヤははつきりと驚きとよく似た思いを抱いた。そして、その中に、寓話の妖怪や恐ろしいものが住んでいる世界を彼に説明した訳ではないのに、彼はいつも一連の神秘的なものを創り出していくのであった。なぜなら、彼は母親のその家に対する敵意のようなものを見ていたし、そこに誰が住んでいるかも決して尋ねたこともなかったから。しかし、一度、父に連れられてそこを訪ねたことがあったが、噴水の前に立ち止まって、悲しい哀感を込めて、（ミナヤはずっと後で知ったことだが）挫折による頑迷さを払いのけて父は言った。

「あの大きな家を見てごらん？　まあ、あそこに、私の従兄弟のマヌエル、つまりは、お前の叔父さんが住んでいるんだよ」。そのときから、彼の内にあるその家と神話の住人は消えてしまい、代わって映画の冒険的英雄の世界となった。そこには、近寄り難い人物が住んでいる

が、しかしながら、その男は彼の叔父であり、ミナヤに対し、一種の誇りのようなものを与えていた。ときどきミナヤは空想するのだが、彼の本当の父親は毎晩新聞の余白にいつ終わるかも知れない計算をした後、テールで眠るような悲しい男ではなく、密入国斡旋業者、あるいは『トルエノ艦長』、『アンティファス將軍』などで、誰か黒い服を着た人。ほとんどいつも仮面をかぶっているが、ミナヤが望むところによると、いつの日にかそんなに遠くない日に長い旅から戻り、彼を引き取りに来る、そして、彼の本当の人生と威厳のある名前が戻る。

彼の父は、別のタイプの人で、ほとんどいつも陰の存在でややうつな詐欺師であり、寝室の赤椅子に座っている。カーテンを閉めると光線は赤身の色調を帯び、背景はピンクで暗室カメラのように小さな逆さまのシルエツトが、暖かい半ば暗闇の中で天井に線描される。青いエプロンの少年、馬乗りの男、遅い自転車乗り本にある挿絵のように綿密だ。それらはうつぶせになって壁の隅まで滑り落ちる。そこで、青い少年の陰で、その少年を先導していた細い線の騎手が消える。

ミナヤはその日の午後何かが起こることを知っていた。戸口に一台のトラックが止まり、恐ろしい汗の匂いをさせている男の集団が部屋に急ぐでもなく入って来た。露わにした両腕で家具を持ち運び、母の衣類の入ったトランクを通りの方へ引つ張って行き、すべてごちゃごちゃにしながら彼の知らない言葉で叫び、彼を怖がらせた。軒先にフックと滑車を取り付け、そこに荒縄を通し、バルコニーから彼の好きな家具類を縛っていた。そして、ミナヤはカーテンの陰に隠れて、タンスがその男たちにばらばらにされ、その上にはいつも石膏の犬が乗った

ていた足の曲がつたテーブル、解体されたベッド、ミナヤのベッドは通りで今にも落ちそうで、侵入して来た運び屋の高笑いの中で、ばらばらに壊れそうになっている光景をじっと見ていたのだった。その午後は彼につらいとか、苦しいとか言わせないために、親類に不幸があったときに着させる水兵服を母親はタンスから出して彼に着せていた。そのため、男たちが与える恐怖はあるとしても、隠れていたのだった。なぜなら、通りを行く子供たちは彼のそんな服装を見たら、胸の青い蝶結びやミサの司祭を手伝う少年の服装を思い出させる馬鹿げた短いマントを見て、示し合わせて意地悪くからかっただろうから。彼らは、彼の家を今、壊している運び屋の男たちと同じように、汚く大きく説明出来ないぐらい悪い奴らなんだ。

「おお、神様」とその後、母は言った。食堂は今や空っぽになり裸になった壁を見ると、絵を飾ってあった跡の傷は明らかだった。紅をさした唇を噛みながら母が声を挙げたが、何もない家ではその声はすでに今までと同じようには響かなかった。戸を閉めて、ミナヤの手を握り両親は黙って歩いた。そして、彼がどこへ行くのと尋ねたとき、答えがなかった。

しかし、彼は突然めっちゃめっちゃになつてしまい、鋭く神経を尖らせていたので、聖ペテロ広場の角を曲がる前に答えはわかつていた。そして、両親は銅製のドアノッカーのある戸口の前で止まった。母がドアノッカーを握っていた。父はネクタイを結び直し、晴れ着姿で背筋をピンと伸ばして、まっすぐに立った。そこで、驚いたことに「さあ、あんたが声を掛けなさい」と父は母に言った。しかし、母は苦々しげにそうすることを拒んだ。「あんたは、私の従兄弟にお別れの挨拶もしないで、マヒナから出て行くことを望んでないよね」。

白い柱、赤色や黄色や青色のガラスの高いドーム、映画のヒーローには似つかわしくない灰色の髪の毛が彼の手を取り、寄木張りの床の大広間に連れて行ってくれたが、そこでは冷たい月のように午後の最も遅い時間の明るさが輝いていた。一方では、たぶん、現実とは思えない大きな陰が、記憶により修正されているとはいえ、世界のあらゆる本を集めた驚異的と言える蔵書に覆われた壁に、溢れるように落ちていた。最初は彼はじっとしていた。高いので、彼の足が床につかない椅子の端に座って、すべてのものが大きいので怖気づいていた。本棚、広場に面した窓、頭上の茫漠とした空間。ゆったりとした喪服の女がやって来て、湯気の立った小さなコーヒークップを置き、彼に何かチョコレート、ボンボン、ビスケットなどを、差し出した。「あなた」と正規な言葉使いをするので、困惑したが、背が高く暗いクリスタルが一杯つまった箱が時計だと発見したりもした。両親と叔父と呼ばれた男は小さな声で、しかも遠い、感情を表面に出さない調子で話していたので、ミナヤを眠くし、彼の興奮の鎮静剤の役割をし、まるで、図書館に一人でいるような、ひそかな喜びに閉じ籠ることを許した。

「マヌエル、私たちはマドリッドへ行くよ」と父は言った。「そして、そこで新規時き直しをするよ。マヒナでは何か企てようとする者にとって、刺激がないし発展性もない。マーケティングもない」。すると彼の母は厳しい表情で彼の隣りにいたが、手で顔を覆った。母が不思議な乾いた音をさせているのが、泣いているのだとわかるには少し時間がかかった。なぜなら、この午後になるまで決して泣くのを見たことがなかったからだだった。それから長年にわたって、同じように母が涙なしに泣くのを見たり観察したりすることになるが、そのときの嘆きが初めて

のことだった。そして、両親が亡くなってしまつてから、彼が知つたことだが、すべて不幸だったか破滅だったかは別として、母は夫と人生に対して執拗にしようもない恨みを抱いていた。その夫はいつも金持ちになろうと企て、それに値する出資者や機会を求め不運にも差し押さえられたり、一度は、つまらない詐欺のため刑務所へ入れられたりした男だった。

「お前の祖母のクリステイナが、まあ、我々の不幸の始まりだ、息子よ。なぜなら、もし、彼女が私の父と馬鹿げた恋に陥り、彼と結婚するためにその家族を放棄しなければ、我々が私の従兄弟の宮殿に住んでいたことだろう。そして、私は商売に勝てる十分な資金を持っていただろう。しかし、お前の祖母は詩が好きでロマンチックで、おお神よ、許し賜え、ああ、私の貧しき悪魔とも言うべき父が、いくつかの詩を彼女に捧げ、彼女に愛と薄暮についての陳腐な決まり文言を並べたら、彼女は彼が登記事務所の書記だとしても構わなかつた。彼女の父のドン・アポロニオ、お前の偉大な曾祖父だが、彼女には相続させないと脅した。そして、連載小説によくあるように、彼女には相続させなかつた。私はそのように信じているが。祖父の人生も残り少なくなつていたが、その不快さゆえに、再び彼女を振り返ったり、また、彼女のことを質問したりすることはなかつた。そして、彼女と私の破滅を招いたのだ。お前とまた、生まれるかも知れないお前の息子たちの破滅もだ。なぜって、どのようにして私は頭を持ち上げてお前に将来を約束することができらうか。私が生まれる前から不運が私に付きまとわっているのに」。

「でも、あなたが文句を言うのは馬鹿げてると思うわ。クリステイナさんが、あなたのお父さ